

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 10 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22530951

研究課題名（和文） 日本と英国の中等教育美術科における創造的カリキュラム

研究課題名（英文） Creative Curriculum: Art in Secondary Education in Japan and the United Kingdom

研究代表者

直江 俊雄 (NAOE TOSHIO)

筑波大学・芸術系・准教授

研究者番号：10272212

研究成果の概要（和文）：日本の中学校における美術カリキュラムの編成動向に関して、各学年において実際に行った美術科の題材配列と教師の見解、美術科指導の実態、言語活動、教材の整備等について全国調査を行った。

英国中西部地域の中高等学校美術科において実施したカリキュラムの編成動向に関する調査を集計分析し、1994年の調査結果からの変遷を明らかにするとともに、学校訪問により、ナショナル・カリキュラム、試験制度その他の要因との関係について調査した。

研究成果の概要（英文）：In Japan, a national survey on curriculum implementation of art in lower secondary schools was conducted. Schemes of works of art in every grade in each school, teachers' views on them, language activities, and tools, materials and facilities in art classes are investigated.

In the United Kingdom, the results from a survey on curriculum implementation of art in secondary schools were analyzed. Changes from the result of the similar survey in 1994 was pointed out. Relationships between the National Curriculum, testing system and other factors were investigated in field study in schools.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：芸術教育

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：各教科の教育（図画工作・美術工芸）、美術教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究と実践の乖離への挑戦

教科教育研究における普遍的な課題の一つは、学校現場における実践活動との関係で

ある。教室の実態から出発し、教育実践に有効な支援となる研究が求められるが、同時に研究対象に対する客観的な視点を保つ必要がある。

学習者と教師の間の相互作用によって日々教室で形成されていく教育内容こそが教科教育の中心であり、記録に残らずに消えていくこれらの創造的な取り組みの結果を広範囲に収集し、その傾向を明らかにすることが、上記の課題を克服する一つの道であると着想し、平成3年から8年にかけて、東京都内公立中学校156校の協力を得て研究を行った（直江「中学校美術科における教科書指導計画案と実態との関係について」平成8年、ほか）。

(2) 教師と研究者の連携による新しいカリキュラム運動

中等教育の美術科では、各校でのカリキュラムの決定に関して、教師の専門性と独自の取り組みを反映させる余地が大きい。その顕在化、共有を促進することによって、美術教育に教師と研究者の連携による新しい「創造的カリキュラム運動」を起こしていきたい。

研究代表者が近年取り組んできた、美術学習における言語活動の役割を重視するアートライティング教育もそうした動きの一つである（直江「後期中等教育におけるアートライティング」平成21年、ほか）。

(3) 英国における状況

研究代表者は、英国での美術カリキュラム研究（直江「イングランド中西部の中学校における美術カリキュラムの編成動向」平成8年、ほか）、日英工芸教育共同研究（Mason, Nakase, Naoe, “Craft Education at the Cross Roads in Britain and Japan” 平成10年）に携わり、それまでの調査結果から日英を比較する研究も行った（Naoe, “Art Education in Lower Secondary Schools in Japan and the United Kingdom” 平成15年）。

その後、各国の美術カリキュラムに関する共同研究に参加し（「英米中韓との比較を通じた我が国の美術教育カリキュラムに関する研究」平成18～20年度）、平成21年度は「筑波大学国際連携プロジェクト」によりロンドン大学に派遣され、現地調査を行っている。

中等教育美術科の教育内容については、「選択は美術科教室と個々の教師に委ねられている」（School Art: What's in it? National Foundation for Educational Research, 2004）との調査報告にあるように、上記日本の状況と類似した側面がある。ロンドン大学アトキンソン教授は、ナショナル・カリキュラムの統一性が個々の教師による多様な実践を隠してしまう弊害からその顕在化の必要性を示唆し（Atkinson, Art in Education: Identity and Practice, 2002）、新しい情報技術による教育者間のネットワー

ク形成にその可能性を託している（Atkinson, Social and Critical Practices in Art Education, 2005）。

2. 研究の目的

(1) 日本の中学校美術科におけるカリキュラムの学校での適用実態の調査を全国規模で行い、全体的動向や集団的特性を明らかにする方法を確立する。

(2) 英国研究者との協力の下に中等学校美術科におけるカリキュラムの学校での適用実態の調査を行い、日本の動向と比較しうる資料を収集する。

(3) 上記調査活動で収集された結果の共有を通して、教員相互の啓発活動、研究における国際連携を促進する。特に、言語活動を重視した美術学習についての研究開発の基礎とする。

3. 研究の方法

(1) 日本の中学校美術科におけるカリキュラム編成動向の調査

平成3年度東京地域における調査を基礎として、対象を全国規模に拡大するとともに、その後のカリキュラムならびに学校状況の変化を反映させ、平成17年度より開始したアートライティング教育、平成6年度から22年度まで継続している英国中等学校の美術カリキュラム実態に関する研究等との比較も考慮して調査内容を作成した。

日本の中学校におけるカリキュラムの編成動向に関する調査（全国調査 中学校美術科のカリキュラム創造力）として実施、国内全中学校10701校を母集団標本とし、無作為に1200校を抽出（約11.2%）、質問紙法により、平成24年5月から8月にかけて回答を収集した（227校回答）。また過去の同調査結果との対応のため、平成3年調査で対象とした地域の学校（地区内全校221校）を全国調査とは別に調査した（29校回答）。調査内容は、平成23年度に実際に行った各学年における美術科の題材配列と教師の見解、美術科指導の実態、言語活動、教材の整備等である。なお、平成23年に発生した東日本大震災の影響を考慮し、当初の調査日程を平成24年度に延期して実施した。

比較データ[1991年]

中学校美術科におけるカリキュラムの実施に関する調査

調査実施者：直江俊雄

調査期間：1991年3月 - 6月

回答者：東京都内8地域の公立中学校美術科教諭（全数294名）、156名回答（53.1%）

目的：中学校における美術カリキュラムの適用状況を明らかにする。

内容：平成20年度に所属する学年におい

て実際に行ったカリキュラムならびに関連する事項

(2) 英国（イングランド中西部）の中等学校美術科におけるカリキュラムの編成動向に関する調査

英国における中等学校美術カリキュラムに関する調査について、ロンドン大学ならびにバーミンガム市立大学の研究者と連絡を取りながら、ウェストミッドランド州の中等学校 67 校から集めた回答結果の集計を進めた。主としてキー・ステージ 3 と 4 におけるナショナル・カリキュラム、中等教育一般証明試験、批評学習、各校におけるカリキュラムの適用、アートライティング教育に関して、各校の実態に即した状況と、前回調査時の 1994 年当時からの変化について、美術科教育の観点から見た状況を検討した。

調査実施者：直江俊雄（日本）

助言者：デニス・アトキンソン（英国ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ）

アニタ・リアドン（英国バーミンガム市大学）

調査期間：2010 年 1 月 21 日 - 3 月 10 日

回答者：英国中西部地域の中等学校美術科 137 校依頼、70 校回答、67 校有効回答（48.9%）

目的：

中等学校における美術カリキュラムの適用状況を明らかにする。

・1994 年、2005 年に実施した類似の調査結果と 2010 年の調査結果を比較する。

・地域の学校における美術教育の現状に関する情報を教師に提供する。

内容：

1. ナショナル・カリキュラム（2007 年版）：教師の見解とキー・ステージ 3 への影響

2. 中等教育修了一般資格試験：教師の見解とキー・ステージ 3 への影響

3. 批評学習：キー・ステージ 3 での学習指導

4. カリキュラムの適用：キー・ステージ 3 で教える内容

5. アートライティング教育：教師の見解と、キー・ステージ 3・4 の授業における学習の機会

比較データ [1994 年]

中等学校美術科におけるカリキュラムの適用に関する調査

調査実施者：直江俊雄

調査期間：1994 年 4 月 26 日 - 6 月 3 日

回答者：英国中西部地域の中等学校美術科 102 校依頼、49 校回答（48.0%）

比較データ [2005 年]

高等学校におけるアートライティングの教育に関する調査

調査実施者：直江俊雄

調査期間：2005 年 1 月

回答者：日本の高等学校美術科教師

1041 校依頼、307 校回答（29.5%）

学校訪問による現地調査を平成 21 年度から合わせて 13 校の協力を得て実施し、各校の実情を背景とした、年間指導計画の特色、ナショナル・カリキュラムや試験制度との関係、学習成果等について教師への聞き取りや授業観察、生徒作品や教材・環境などを通して検証した。

4. 研究成果

(1) 日本の中学校美術科におけるカリキュラム編成動向の調査

227 校からの回答データを入力し、平成 23 年時点における、全国の中学校美術カリキュラムの実施状況を一覧できるデータを作成した。この資料を教育関係者が共有して使用可能な形式に整理し、ウェブを通して公開する準備を進めた。

(2) 英国（イングランド中西部）の中等学校美術科におけるカリキュラムの編成動向に関する調査：新ナショナル・カリキュラムに関する見解（図 1）



図 1 新ナショナル・カリキュラムに関する見解

【質問】 新ナショナル・カリキュラム（2007 年版）美術・デザイン科キー・ステージ 3 に関する次の記述について、あなたはどの程度肯定または否定しますか。

（NC...「ナショナル・カリキュラム」の略）

[a] NC に基づいて教科の指導計画を変更した

[b] NC は指導における美術教師の決定権を重視している

[c] NC は教室での教育実践に配慮してい

る
[d] NC は我々の教科の方針・実践と合致している

調査対象校において、ナショナル・カリキュラム（2007年版）美術・デザイン科キー・ステージ3は、広く受け入れられ、支持されている。

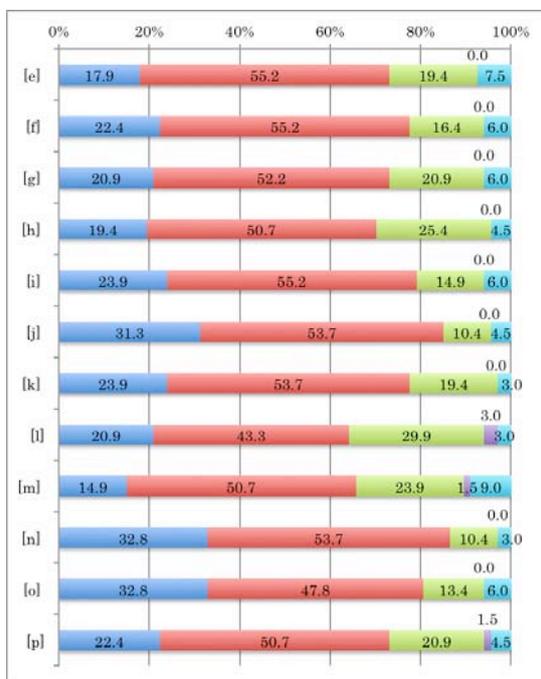
質問[a]に対しては、回答者の83.6%（強く思う22.4%、そう思う61.2%）がNCに基づいて指導計画を変更したと答えている。これは、1994年の調査結果71.4%（強く思う12.2%、そう思う59.2%）から見れば堅実な増加を示している。

肯定意見が顕著な増加を見せたのは、NCと教師の教室での実践との関わりについての回答である。質問[b]では、77.6%がNCは教師の決定権を重視していると感じていることが明らかになった（1994年の51.0%から増加）。

質問[c]では、80.5%がNCは教室における教育実践に注意を払っていると考えている（1994年の44.9%から増加）。

大多数の回答者（91.0%）が、NCは自分たちの教科の方針や実践と合致していると認めている。

(3) 英国（イングランド中西部）の中等学校美術科におけるカリキュラムの編成動向に関する調査：新・ナショナル・カリキュラムの影響（図2）



■ 強く肯定 ■ 肯定 ■ 否定 ■ 強く否定
■ どちらでもない

図2 新・ナショナル・カリキュラムの影響

[質問] 新ナショナル・カリキュラム（2007年版）美術・デザイン科キー・ステージ3に関する次の記述について、あなたはどの程度肯定または否定しますか。

NCに基づいて、以下の点を一層重視するようになった。

- [e] 造形要素
- [f] 生徒の想像力
- [g] 多文化主義
- [h] 観察
- [i] 制作の技能
- [j] 知識と理解
- [k] 応用美術と純粋美術両方の実技
- [l] 新技術
- [m] 地域社会との連携
- [n] 伝代の美術、工芸、デザイン
- [o] 複合領域的な取り組み
- [p] 全校カリキュラムや他教科と連携

1994年の調査結果では、教師の大多数がNCの影響を認めたのは、「知識と理解」の項目のみであった。

2010年では、回答者は、NCの影響を他の項目についても同様に、広く認めている。

特に、「生徒の想像力」の重視については、肯定的な回答が1994年の26.5%（6.1%+20.4%）から2010年には77.6%（22.4%+55.2%）へと飛躍的に増加した。

このことは、知識と理解がNC導入期（1992年）から美術・デザイン科の堅固な基礎で有り続けている一方で、想像力の役割は過去15年の間に重要性を増してきたことを示している。

ナショナル・カリキュラムについては、初の導入後15年以上が経過し、教育現場に定着するとともに、現在進行しているキー・ステージ3における改訂についても、対応への不安や大きな課題等は顕在化していない。一方で、中等教育一般証明試験へのカリキュラム対応の早期化や経営技術教育委員会による職業科目試験の導入などで変化が見られる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① Toshio Naoe, Tradition and Contemporary Life: Art Writings of Upper Secondary School Students in Japan, *Paper complication on the 3rd World Chinese Art Education Symposium*, China Academy of Art Press, 2012, pp. 116-130.

- ② 直江俊雄、英国の中等学校における美術

科ナショナル・カリキュラムへの対応イ
ングランド中西部における調査（1994
年・2010年）から、芸術研究報 32、査読
有、2012年、pp. 71-82.

- ③ 直江俊雄、集団での鑑賞活動と心理的快
適度-二次元気分尺度による測定を手が
かりに、芸術研究報 31、査読有、2011年、
pp. 57-66.

〔学会発表〕（計 2 件）

- ① 直江俊雄、英国中等学校における美術カ
リキュラムの編成動向、美術科教育学会、
2012年3月28日、新潟大学
- ② 直江俊雄、集団での鑑賞活動参加者の心
理的快適度、美術科教育学会、2011年3
月27日、富山大学

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~naoe>

/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

直江 俊雄 (NAOE TOSHIO)

筑波大学・芸術系・准教授

研究者番号：10272212